伝統芸

文楽

戦国のヒーロー 垣根越え躍動

能・文楽・講談　真田幸村三変化

商都・大阪には古くから、異業種交流を育む土壌があるといわれる。芸能分野でも、ジャンルの垣根を越えた交流が盛んだ。能楽師、文楽の演者、講談師、音楽家らが集い、同一テーマによる能、文楽、講談を連続上演する特別な公演が17日、山本能楽堂（大阪市中央区）で開催された。放送中のNHK大河ドラマ「真田丸」にちなみ、能楽師・山本章弘らが企画した。

「大坂の陣」をモデルにした文楽「鎌倉三代記」では、豊竹英大夫、竹沢宗助の義太夫節に合わせて、吉田幸助が人形を遣う。文楽の専用劇場では通常、人形遣いは「舟底」と呼ばれる一段低くなった場所で操り、客席との間は手摺で仕切られているため、客席から足元は見えない。

能舞台では全身があらわになり、足遣いが舞台を踏み鳴らして音を出す様子や、見得をきる動作での3人の呼吸と絶妙なバランスまで、つぶさに観察することができた。

また、講談をベースにした「音楽絵巻」では、講談師・旭堂南左衛門の語りに、西洋の古楽器・リュートのもの悲しい音色が寄り添う。

徳川家康と幸村の対決を描いた新作能「真田幸村」は、「斬組」と呼ばれる激しい立ち回りが見どころだ。スピードと躍動感で観客を魅了する。

章弘の祖父・博之は謡曲好きが高じ、両替商から能楽師に転身。1927年に能楽堂を創設した。戦災に遭ったが、商人らの浄財によって再建された。旦那衆が様々な芸能を楽しむ〈社交の場〉として親しまれてきた歴史は、現代にも受け継がれている。

（坂成美保）

哀愁漂うリュートの響きと迫力ある講談の語りが融合した「音楽絵巻」

㊤文楽「鎌倉三代記」の一場面。人形遣いの足元が客席から見える珍しい舞台となった
㊨能楽師のアクロバチックな動きで観客を引き込んだ新作能
＝いずれも泉祥平撮影